

# 《déjà》と「もう」

## 副詞の日仏語対照研究

青木三郎

はじめに<sup>1)</sup>

現代仏語の *il est déjà parti* は普通日本語で、彼はモウ出発した、と訳される。*déjà* とモウはこの場合意味的に同価と見做されるが、他の様々な文脈で常に一定して意味的同価が保たれているわけではない。*déjà* について言えば、例えば、*C'est déjà pas mal* はそれだけでも（モウ）悪くない、と解せられるし、*Comment s'appelle-t-il, déjà* に至っては、彼の名前は何だ(った)っけ、でモウの入る余地は全くない。日本語のモウの用法も複雑で、ヒステリックな例、あなたったら何よ、モウ（知らない、ふん!）には *déjà* ではあらわせない含みがある。

本稿ではこの二つの日仏両語の副詞について対照的な観点から観察と考察をすすめ、そのはたらきの類似と相違を明らかにしたいと思う。対照的研究が可能だという根拠はまず直観の段階で両語に共通なはたらきを感じるという認識である。より具体的に言うと、これらの副詞が姿こそ異なれ或る叙述内容（バイイの *dictum*、寺村のコト）の関わるアスペクト、時間、質・量などの領域限定に密接に結びついているという直観である。実際の対照的観察を行なう前提として言えることは今のところその程度のことである。もし言語に活動としての普遍性と体系としての特殊性があるとするならば対照的研究は常にこの言語の二面性を視野に入れた研究でなければならないだろう。本稿では日仏両語を言語活動の一般的枠組の中でとらえ、問題の副詞がそれぞれの言語においてどのようなはたらきをしているか見てゆくが、その作業を通じて言語の普遍性（一般性）と特殊性について何らかの具体的な認識、知見が得られれば当面の目的は一応達成したと見做したい<sup>2)</sup>。

その為にはまず仏語の *déjà* の観察から始め、そのはたらきの規定を試みる。その次に *déjà* の観察で提唱されることになる分析概念を用いてモウの用法を検討してゆく。

## 1. *déjà*

この副詞については、*Trésor de la Langue Française* (T. L. F. と略), *Le Petit Robert* (P. R. と略) 等の仏辞典の記述, 又 C. MULLER (1975), R. MARTIN (1980), J. HOEPELMAN & C. ROHRER (1980), C. VET (1980), J.-J. FRANCKEL (1982) の論述が詳しい。これらはそれぞれに特徴があるが、今これら一つ一つを吟味検討するのは本稿の目的ではない。ただし以下観察の途中で援用あるいは批判の対照となるであろう<sup>3)</sup>。

*déjà* の用法は一般に時間的用法 (T. L. F. の sens temporel) と評価的用法 (T. L. F. の sens logique) に大別される。P. R. は時間的用法を更に *dès l'heure présente* (現在時から), *dès maintenant* (今から) の解釈を受ける場合 (例えば *Il est déjà quatre heures.* モウ四時です。)と *auparavant, avant* (以前に, 前に) の解釈をうける場合 (例ば *Je l'ai déjà rencontré ce matin.* 私は今朝すでに彼に会いました。)に下位区分する。評価的用法とは話者が事態について評価 (*appréciation, évaluation*) を行なう場合である。例ば, *Ce n'est déjà pas si mal* (それだけでも悪くはない) のように, 他によりよいものがあるにはあるが現在の状態でもすでに悪くはない, というような話者の評価認識を表わす。又, T. L. F. にも P. R. にも記述がないが, 日本語でトリアエズ<sup>4)</sup>と解すことの出来る用法 (例えば, *Je vais déjà lui annoncer cette nouvelle* とりあえずこのニュースを彼に知らせておこう), それに議論の論拠の一つを提出する, 日本語の第一に似た用法 (例ば, *Impossible de lui faire confiance. Déjà il n'est pas venu hier à la réunion* 彼を信用するなんてとんでもない。第一きのうの会合にも来なかったじゃないか) を加えておかなければならない。その他先に見たように疑問文で忘れてしまったことを聞き返す, *Comment s'appelle-t-il, déjà?* の使い方もある。

以下では先ず *déjà* の時間的用法を検討し, この副詞のはたらきを一応規定する。その次に評価的用法を調べ前もって規定した *déjà* のはたらきを再検討する, という順序で見てゆくことにする。結論を先取りすると, *déjà* は基本的に *précocité* (早なり) を表わすが, どのような *déjà* の操作 (*opération*) と文脈で *précocité* が表わされるのかは観察とともに明らかにされよう。

### 1.1. 時間的用法

ここでの問題は二つある。(1) *déjà* の二つの時間的用法のちがいはどのよう

に特徴づけられるか。(2)二つの用法に共通する *déjà* のはたらきは何か。  
はじめに(1)の問題を次の例文を検討しながら考えよう。

[1] A. Vous dînez avec nous?

今晚私たちと食事をしませんか。

B. Non merci, j'ai déjà mangé.

いいえ、遠慮しますわ。食事はもう済ませましたから。

(Dictionnaire du français Langue étrangère N. 2)

[2] Il est déjà quatre heures.

もう四時だ。

[3] Tu t'en vas déjà?

君、もう行っちゃうのかい

[4] Il a déjà été au Japon ?

日本に行ったことがありますか。

例文[1]~[3]は基準時点として発話の現在時が設定されており、時制が[1]と[2]は複合過去、[3]が現在形に置かれているが、すべて発話現在時の事態・状態が問題となっている。この用法は一般に前提の概念で解釈されている。[1]は発話者Bが、Aの誘いから考えて、Aは「Bが今晚まだ食事をしておらず」、従って「食事はこれからだろう」という予想を立てていると前提する。それに対しBは、そのAの予想に反して、「すでに今、食事は済んでしまった状態にある」と断定する。[2]では話者自身まだ四時にはなっていない、つまり「四時になるのはもっと後のことだ」という前提を立て、にもかかわらず、「今四時だ」という断定を表わしている。[3]では相手がいとまごいをするというような状況において、話者が、「君が行ってしまうのはまだ先のこと、まだ今のことではない」という前提に対して、すでに事態が実現化してしまうことを断定している。このように事態の実現が過去([1])、現在([2])、将来([3])だとしても、*déjà*は発話状況から見た事態のあり方の認識判断に関与していると言えるだろう。この用法の観察から出発して先のC. MULLER, R. MARTIN, J. HOEPELMAN & C. ROHRER, C. VETの研究では*déjà*の中に積極的に前提の存在を認めようとするのだが、[4]に代表される過去の経験を表わす用例の中には、[1]~[3]のような前提構造は存在しない。[4]は話者が、「彼はまだ一度も日本に行ったことがない」(il n'a jamais encore été au Japon.)という前提に対し、すでに(一度)事態は成立していると断定する文である。これに関してC. MULLERは*déjà*にまつわる前提構造は二つ存在す

るとし、ne~pas encore P と ne~jamais encore P を提唱する。その相違は ne~pas encore P の場合は未来時において事態の実現化が前提となるが、ne~jamais encore P の場合、未来における事態の実現化は可能であるというだけである。しかしこれでは *déjà* の統一機能を把握したとは言えないだろう。確かに共通して ne (-pas/jamais) encore の形があらわれるが、逆に encore を問題にした時に *déjà* が前提構造としてあらわれてしまえば、結局、堂々めぐりで *déjà* も encore も単なる直観的解釈の域を越えることは出来ないだろう。また[4]については、彼が日本に行くのは初めてのことでない、という内容が含意されていると考えても構わないと思われるが、それではこの解釈と上記の前提とはどうかみあうのだろうか。

*déjà* の時間的用法の統一的機能を明確にする為には、やはり、二用法を同質に扱わなければならない。二用法にまたがるのは *déjà*+複・過の場合であるが、これをどうしても再検討する必要があるだろう。

[1]に戻ろう。先述のとおり *j'ai mangé* という事態は発話時点以前に成立している。これを時間軸上に定着すると、例えば、*j'ai mangé à cinq heures* (五時に食事をした) が得られる。このことから複・過は発話時点とは無関係に事態を成立させるはたらきを有していると考えられよう。が、[1]では事態の成立そのものではなく、行為の結果状態 (*état résultant de l'acte*) が問題となっている。この場合、結果状態の解釈は発話時点に関係づけられることによって生じることは言うまでもない。換言すると発話時点において話者が「その状態の成立の確認」をしていると言ってよいと思う。このように考えると、*déjà* はこの状態の成立を確認する時点が予想よりも早くあらわれたことを示すと捉えることが出来る。予想よりも早く、という考え方が前提議論をひきおこすわけであるが、前提の問題があくまで文内容に関わるものだとすると、*déjà* それ自身は文内容の構成には直接かかわらないのだから、やはり *déjà* の本質に前提の存在を認めることには無理があるろう。[1]において *déjà* は予想よりも早い時点として状態成立の確認時点を設定していると考えの方が自然であると思われる。実はこの事態・状態成立の確認点の設定の仕方に *déjà* の基本的なはたらきがあるのである。そうすると当然どのような操作によって確認点を設定するのが問題となる。

最初の仮説を提唱しよう。

*déjà* は、基本的に、予め話者の意識あるいは文脈によってたてられた事

態成立の基準点 ( $T_i$ ) から出発し、実際に事態成立を確認する時点 ( $T_j$ ) をそれに先行する ( $T_j < T_i$ ) ものとして設定する。

[1]で実際の事態成立の確認は発話時点 ( $T_o$ ) であるが、*déjà* の導入によってこの時点は予め設定された事態の確認点 ( $T_i$ ) より先行した時点、即ち以前の時点であると規定される ( $T_j = T_o < T_i$ )。この場合  $T_i$  は  $T_o$  よりも後の時であるから不確定な時点であるが、それ故に予想・期待された事態の成立する時点、即ち基準点として扱えられるのである。これは *déjà* が[1]のように発話時点と直結している文脈における制約であって、*déjà* 自身に内在するものではないだろう。何故なら過去の経験をあらわす[4]の場合は必ずしも未来における予想や期待がなくても十分に解釈可能だからである。

ここで[4]を再解釈してみる。まず実際の事態の確認点が、[1]とは異なり、過去の或る一時点であることが扱えられる。*déjà* はその時点 ( $T_j$ ) を発話時点 (即ち基準点  $T_o = T_i$ ) 以前の時点として設定する。基準点が発話時点ということは、予想や期待の時点ではなく文脈上、現在時点が事態成立を認めうる基準点となっているということである。

[4]でもう一つ重要な点は、日本へ行くコトがいつ成立したのか、問題になっていない点である。先に見たように複・過は時間軸上の一点に事態を定着することが出来るが (例えば *il a été au Japon l'année dernière* 彼は去年日本へ行った)、[4]の場合 *déjà* はただ過去に事態が成立したことを確認出来る時点を設定するだけで、それがいつかは明示しない。つまり *déjà* は事態の時間軸上の定着 (localisation temporelle de P) には関与せず、事態成立の確認点の設定 (validation temporelle de p) のみに関わるのである<sup>5)</sup>。[4]では正確には過去の一時点で事態成立の確認が行なわれるのではなく、その時点から発話時点にいたるまでのゾーンの中で一度事態が成立すればよい。[4]は確かに *il a déjà été une fois au Japon* (彼は一度日本に行ったことがある) と数量化が可能である。

一応ここまでの考察をまとめておく。

- (i) *déjà* は事態成立の確認点 ( $T_j$ ) の設定に関与する。設定の仕方は予め文脈上設定された  $T_i$  以前の点をとる ( $T_j < T_i$ )。
- (ii) かくして定められた  $T_j$  において事態成立が確認されるが、 $T_j$  は事態成立の確認点であって事態そのものを時間上に位置づけるはたらきはない。
- (iii) *déjà* の関わる事態は、(a)結果状態の成立の確認、つまり一つの事態の

あり方を確認する場合と、(b)事態を一つの事件 (*événement*) と見做しその生起、発生を確認する場合とがある。(経験の用法)

このように考えてくると少なくとも次の二点が疑問として残る。(i) 予め設定された、出発点となる事態成立の基準点  $T_i$  は、具体的にどのように設定されるのか。(ii) 事態の成立確認点の設定と時間軸上の定着との関係はどうなっているのか。

(i) の問題から考えよう。

まず発話時点が事態成立の確認点と重なる場合。この時は例文[5]~[7]のように文脈によって予め設定される  $T_i$  が変わる。

[5] Tu t'en vas *déjà*?

君、もう行っちゃうのかい。

[6] Votre bébé a onze mois et il marche *déjà*! (Niveau 2)

おたくの赤ちゃんは11ヶ月でもう歩くんですか。

[7] Je suis désolé. Il est *déjà* parti sans vous attendre.

どうもすみません。彼はあなたを待たずにもう先に行ってしまいました。

[5]では話者の予想, [6]では11ヶ月ではまだ赤坊は歩かないという一般的知識, [7]では相手の予想に反して、それよりも早く事態が成立してしまう。

次に事態成立の確認点が発話以前の場合,  $T_i$  は発話時点に重なる。従って発話時点で問題になる事態成立が文脈上必要となるわけだが、この場合、話者の予想や見積り等は不要となる。

[8] Je te l'ai *déjà* dit mille fois!

そのことはもうすでに何度も言ったじゃないか。

例[8]は発話時点において言うべきことがあるという状況設定があり、それに対し言うべき事柄はすでに過去に成立確認されているとする。

先述のとおり, 例[4]でも現在時に日本へ行くことが確認すべき事態として問題にしなければ, *déjà* を用いる必要がないだろう。この副詞はそれ自身事態成立の確認点を設定するのが本質的なはたらきであり, 事態の成立には直接関与しない。そして, その時点が何処に位置するかで文脈上予想, 見積りが現われたり, 現時点の話題が現われたりする。

第二の問い, 即ち事態成立の確認点の設定と事態の時間軸上の定着との関係についての検討に移ろう。

今まで複・過の結果状態と過去の二用法と *déjà* の観察を通じてこの副詞のはたらきを考えてきた。複・過が過去の一時点に定着された場合、過去の解釈は当然出来るわけであるが、果して結果状態の解釈はうけるだろうか。この問いを検討することは、とりもなおさず、事態の時間的定着と確認の関係を明確にする鍵になると思われる。

次の例文を見てみよう。

[10] Pierre est parti à cinq heures.

ピエールは五時に出発した。

[11] A cinq heures Pierre est parti.

五時にピエールが出発した。

[12] A. J' aimerais partir avec Pierre.

B. (?) Il est *déjà* parti à cinq heures.

A. ピエールと一緒に出発したいんだけど。

B. 彼はもう五時に出発してしまいましたよ。

[13] \*A cinq heures Pierre est *déjà* parti.

\*五時にはピエールがもう出発した。

[10]はありふれた例だが、ピエールの出発が五時に位置づけられている。[11]で五時はいわゆる主題化され、五時に起きた事件としてピエールの出発を定着している。[10]と[11]の重要な相違は、後者では五時が事態成立の確認点であり、発話時点とは関係のない「自律した語りの枠」を設けているのに対し、前者[10]では複・過によってまずピエールの出発が現在より以前に成立したことを表わし、五時はその成立の定着時点として言わば補足的に導入されることである。[10]は現在における結果状態と解釈される可能性もあるが、それは[11]と違って[10]は現在時と全く無関係ではなく、二次的に現在時とのかかわりで解釈出来るからであろう。これは五時という時点が現在時との関係で規定される時点だと考えられるからで、必ずしも常にすべての場合現在と結びついていくわけではない。[10]はやはり過去の出来事を表わしているのが第一義と言うべきだろう。さてこれに *déjà* を導入すると[12]が得られるが、インフォーマントの一人によるとこの例は奇妙だとのことである。しかし別のインフォーマントは全く可能であるとしている。何故このようなばらつきが起こるのか。[12]を容認するインフォーマントにとっては現在時で出発する／しないが問題になっており、*déjà* は過去において事態成立が確認されたということを示している。その事態成立の時点が五時なのである。[12]を奇妙に感じるネイ

ティブスピーカーにとって、その奇妙さはおそらく *Pierre est déjà parti* (ピエールはもう出発した) という結果状態と *Pierre est parti à cinq heures* (ピエールは五時に出発した) という過去の解釈が重なり矛盾し合うからだと思われる。[13]に至っては全く非文であるが、この場合は先述のとおり五時が事態成立の確認点になっており、発話時点とは関係がないのだから *déjà* による結果状態の解釈の入りこむ余地がないからである。五時が発話時点と同等の資格で機能する為には、

[14] *A cinq heures Pierre était déjà parti.*

五時にはピエールはもう出発していた。  
のように大過去を用いなければならない。

[12]の観察から *déjà* と時の状況補語を伴った複・過は解釈が不安定であるように思われるが、先の理解が正当であることを確認する為に次の例文を見ておこう。

[15] *On s'est déjà rencontrés ce matin.*

けさ(一度)お目にかかりましたね。

[16] *Qu'est-ce qu'il vent encore? Il m'a déjà téléphoné hier.*

まだ何が欲しいんだ、あいつ。もう、きのう電話をよこしたじゃないか。

[15]では出会いがすでに過去に一度成立しているが、その事態成立は *ce matin* に定着されている。ここでは、現在時点で出会うことが問題となっており、その事件についてはすでに過去に成立確認されているという内容をもつ。[16]においても現在時点で彼が又私に電話をよこしたというような状況設定において、すでに同様の行為は過去(きのう)なされたことを表わしている。

以上の観察からも分かるように *déjà* はあくまで事態成立の確認点の設定 ( $T_j < T_i$ ) が第一義であり、この副詞の興味深いところは、文脈上  $T_j$  と  $T_i$  に結びつけられる事態のあり方が様々に変化し現われるところである。確認点と事態成立の定着時点は本質的にレベルの異なる時点であり、両者の混同は避けなければならない。

*déjà* の時間的用法に関する基本的なはたらきは以上で明確にされたと思うが、この考え方を基にして、少なくとも *déjà* と動詞の時制の制約には触れておく必要がある。

[17] *Pierre dort déjà.*

ピエールはもうねている。



[18] \*Pierre dormira *déjà*.

[19] Pierre dormira *déjà* à huit heures.

ピエールはもう八時にね(ている(だろう))。

[20] \*Pierre va *déjà* dormir.

例[17]～[20] ([17][18]は C. Ver 1980より借用)は動詞現在形及び未来形と *déjà* との共起の問題だが, [17]は現在形で許容性に全く問題がない。[18]は単純未来形と *déjà* が共起しないことを表わす例である。単純未来形は時の状況補語を供なわない場合に発話時点での話者の推定を表わすことが多い<sup>6)</sup>。一方では, ねる/ねない, *dormira/dormira pas* の内容的対立に対し話者は *dormira* と推定判断を下すが, 他方 *déjà* によって予想よりも早く発話時点で事態が成立してしまっていることを示しているのであるから矛盾をきたす。[19]は同様に未来形だが許容文である。この場合ピエールの就寝という事態の成立確認点が時の状況補語(à huit heures)によって未来時に移行したと考えられる。未来時は発話時点とは基本的に断絶し不確定な領域 (domaine du non-certain) に属するが, *déjà* が未来に移行するということは即ち (i) 話者にとってはあくまで事態成立の実現化は可能な域を出ず, 従って推定判断が出来, (ii) しかしその可能世界の中では確定的な領域 (現在, 過去) におけると同様に事態成立は実現したものとみなされる。*déjà* はこうした領域の中で予想より早い時点を設定するのである。[20]は, ピエールはもうねるところだ, のように解釈出来そうだが全く不可である。理由は Pierre va dormir が単に未来を表わすのではなく, 同時に発話時点においてまだ事態は成立していないという状態も表わしている為, 発話時点で事態成立を確認する *déjà* とは相容れないからである。

半過去, 単純過去に移ろう。

[21] Pierre dormait *déjà* lorsque sa femme est rentrée à la maison.

ピエールは妻がもどってきたとき既にねていた。

[22] C'est un procédé qui se pratiquait *déjà* dans les années cinquantes.

それは50年代にすでに使われていたやりかただ。

[23] \*Il but *déjà*. (Guillaume 1974)

[24] J'étais encore dans ma tendre enfance et aux bras de ma nourrice, quand ma nature cruelle et farouche montra *déjà* sa barbarie.

(Camus, *Dév. Croix* T. L. F. より借用)

私はまだ幼年期で乳母のうでの中にいたが, その時すでに私の残酷で人

になじまない性格が野蛮な行為となってあらわれた。

[21]の *déjà* は過去の基準点、即ち妻の帰宅時点でピエールはすでに寝てしまっているということを表わし、*il dort déjà* が単に過去に移行したものと考えられる。[22]は今もそのやり方は使われているが、今が初めてなのではなく、すでに以前に使われていることを表わす。[21]は発話時点が事態成立の確認点として設定される *déjà* の用法に準じ、[22]は発話時点よりも以前に事態の成立確認点を設定する用法に準じていると言えよう。ただし複・過の場合と異なり *déjà* は事態に直接かかわるというよりも、*à cette époque déjà* (その時代すでに) のように現在という期間以前のある期間全体に係っているように思われる。半過去の用法は多岐にわたり *déjà* との共起制限は複雑であるが、この問題には立ち入らない。

[23][24]は単純過去の例だが、つとに G. GUILLAUME (1974) は *déjà* が単純過去 (アオリスト) とは *quasi-impossible* だということを指摘している。R. MARTIN (*ibid.*) によると T. L. F. の資料に少なくとも20の実例は存在するそうである。この共起についての詳しい研究は、J. HOEPELMAN & C. ROHRER (*ibid.*) にあるが、それによると単純過去と共起する *déjà* は彼らの名付ける *itératif/ponctuel* の用法 (本稿の経験に相当する) のみである。[23]の非文性は、単純過去がそれ自身、発話者の空間とは全く独立したところで事態成立とその確認がなされ、結果状態をあらわすことはないのに対し、*déjà* は発話時点 (基準点) における結果状態の成立確認に関与すると感じられるからであろう。[24]は T. L. F. からの借用だが、この文脈で暗黙のうちに示されているのは私の残酷で人になじまない性格が語り手の現在において問題となっているということである。しかしその残酷で獰猛な性格が野蛮な行為として現われたのは、今が初めてではなく、幼少の頃まだ乳母の腕の中に抱かれていた頃すでに現われているのである。このような文脈における *déjà* は既に見た用法である。

*déjà* と時制の関係だけでも細かに観察するとまだ興味深い問題が存在するが、この副詞のはたらき自体は以上で十分に明らかにしえたと思う。

## 1.2. 評価的用法

評価的という命名は必ずしも適切であるとは言えないが、事態のあらわす程度、量等に対する主体 (話者) の判断が問題となるので、評価的 (*appréciatif, évaluatif*) と一応名付けておく。

例文の検討から始めよう。

[25] Mille francs, c'est *déjà* une somme. (Niveau 2 より借用)  
千フランか。それだけでも大した金額だよ。

[26] Vous avez rédigé trois chapitres. Ce n'est *déjà* pas si mal.  
三章お書きになったんですか。それだけでも大したもんですよ。

[25]では、話者がこれなら金額 (somme) の名に値する金額の範囲が問題となっていると考えられるだろう。日常ひんぱんに、こんな金額じゃお金を持っていううちには入らないよとか、こんな額じゃお金の名に値しないよ、というような認識は仏語でも日本語でも行なわれているが、[25]の文脈では、一方に、千フランなどはお金のうちに入らない、金額と呼べるのはそれ以上のもっと多額の金額のことである、という認識があり、他方に、話者にとっては千フランはお金と呼ぶことの出来る金額、その名に値する金額だという確認がある。このように、*somme* はこの場合客観的な金額を意味するのではなく、主観的に金額と呼べる領域を設定していると考えられる。この視点にたつと[25]において千フランは話者にとって金額と呼べる (その名に値する) 領域の成立が可能になる出発点と言えよう。より正確に言えば、話者が金額と呼べる領域の成立を確認する点 (程度) として千フランが規定されているのである。まさに *déjà* はその領域成立の確認点を設定するのに関与している。予め X フラン (ただし X フランは千フラン以上) において金額の名に値する領域が成立する、と基準をたてておき、その額を基にして、それ以下の千フランを話者が領域成立の金額として認めるのである。この考え方が許されるならば、*déjà* の時間的用法と相通じたはたらきが認められよう。つまり *déjà* は (i) 時間的用法においては事態成立、評価的用法においては評価の対象領域の成立を話者が確認する (時・程度) 点を構築しており、(ii) その確認点は予め設けられた基準点よりも以前の点 (時間的用法)、以下の点 (評価的用法) として設定される。以前、以下で事態、状態、評価の対象領域が成立してしまうという意味で、*déjà* は常に、言わば、*précocité* を表わしていると言えるだろう<sup>7)</sup>。

[26]も[25]とほぼ同様に解することが出来る。三章書いたという事態が評価に値する点、つまり評価の領域に入る点として把握されるのである。

ところで[25][26]で注目すべきことは、どちらも訳語の示すように大した評価をうけていることである。ロワイヤル仏和辞典には、この用法について、「かなりの程度であることを強調する(p. 520)」という説明があるが、この解釈と *déjà* とはどうつながっているのだろうか。今迄検討してきた仮説に即して考えると、やはり、*déjà* の構築する *précocité* が関与していると思われる。つ

まり評価対象の領域がどの点で成立確認されるかという問題に対し、*déjà* は言わば到達すべき程度として設けられた基準点を中心にして、実際、評価領域を成立させる（程度）点を設定するわけであるから、この成立点は二つの意味合いを持つことになるのである。一つは、話者にとって基準以下の点ですでに到達すべき程度に達したこと。もう一つは、予め設けられた基準点から見ると、まだ到達点には達していないこと。この二つの意味合いが互いにぶつかりあうことによって、話者にとっての基準点が到達点でありながらそれ以上の点の存在がほのめかされるのである。このような程度の規定がおそらく一方で「それだけでも」、他方で「大したものだ」という複合的な評価となって現われるのだろう。

次の例は *déjà* が或る事件の進行、段階を問題にする例である。

[27] Elle ne protesta pas. C'était *déjà* un début de complicité.

彼女は反抗しなかった。それは既に共犯のはじめの現れだった。

[27]は *complicité* (共犯) の概念が問題となっているが、ここでは共犯の様々な具体的なあらわれが段階として扱われている。つまり段階としては共犯の準備段階、本格的段階などいろいろ考えられるだろう。その総体が言わば共犯の概念領域全体を構成しているのである。*déjà* は前もって共犯と言うことの出来る範囲を決めておき、それを基準にして、彼女が反抗しないという事態を共犯の領域には入らない、基準以前、以下の段階と規定する。話者はしかしそれも共犯の領域に入るものと認めるのである。段階を問題にする為に時間的要素が介入する観を与えるが、ここでの *déjà* はいつ事態成立の確認をするかが問題なのではなく、あくまで事態が共犯のどの段階に位置づけるのかというレベルで機能している。

以上の分析によって *déjà* の本来のはたらきがどんな文脈に現われるかで解釈が多様になるさまは明らかになったと思われる。文脈を細かく見てゆくとこの小論では論じきれない問題が続出する。全部を網羅することはとうてい不可能だが、*déjà* の具体的観察を終えるにあたって次の二つの *déjà* の用法は見ておこう。

[28] Je vais *déjà* lui annoncer la mort de notre père.

とりあえず、お父さんの死んだことを彼に知らせよう。

[29] Essayons *déjà* de résoudre cet énigme.

とりあえず、この謎を解明してみよう。

この二例の特徴は或る目的達成の為に必ずべき一連の行為が文脈上想定されて

いることである。[28]は例えば話者が現在おかれている状況で、ごたごたを解消する為にとらなければならない処置に<sup>1</sup>対面している、というような文脈を想像出来るだろう。その様々な処置が言わば一つの領域を形成するのであるが、状況突破の為の決定的処置、或はましな処置の存在を想定し、それには到らない処置としてお父さんの死を彼に知らせることが把握されると考えられる。この処置もなすべき処置の一つであること、そして他にもっとなすべき処置のあることの二つの意味が *déjà* によって表わされているのである。[29]も同様、謎解きは問題解決の決め手ではなく、それには到らない点として設定されるわけだが、と同時に、問題解決の手段の一つとして把握されているのである。

このように *déjà* には或る事態を目的達成の為すべき行為の一つとして成立させ、確認する用法があるのであるが、もう一つの用法は議論の論拠として事態を提示する用法である。

- [30] Si le “temps” présent en tant qu’élément déictique marque indubitablement la coïncidence du procès de l’énoncé avec le moment de son énonciation, il s’avère malheureusement impossible d’assigner une limite nette à ce que l’on doit considérer comme l’actualité de cette énonciation. *Déjà* le présent peut être employé pour référer au passé immédiat.

(D. Maingueneau, *Approche de l’énonciation en linguistique française*, p. 60)

もし現在形が指示語として発話時点と発話行為の一致をあらわすのに疑いはないにしても、残念ながらこの発話の現在と見なされるものとはつきり限界をたてることは出来ない。第一現在形は近い過去をあらわすのに用いることもできる。

- [31] Ce ne sera pas facile de retrouver ce bonhomme. *Déjà* rien ne prouve qu’il n’a pas quitté la ville.

そいつを捜しだすのは容易なことではないぞ。第一このまちを離れていないという証拠は一つもないんだぜ。

[30]はテンスとしての現在形が発話の現在を表わすとは限らないという説明だが、その結論を導く論拠が問題となっている。論拠は様々にうちたてるのが可能であるが、その論拠に先立って話者は「現在形は近接過去を表わすことがある」という論拠が成立しているのを確認する。換言すると、この論拠はすでに論拠立て (argumentation) の始まる時点において成立している論拠なので

ある。その意味で他とは区別された論拠であり、従って重要な論拠となるのではないだろうか。この文脈では、*d'ailleurs* と非常に近い意味を担うが、微妙な差についてはここでは言及できない<sup>8)</sup>。

以上 *déjà* の用法を観察したが、この副詞の安定して担うはたらきは、基準点以前、以下での事態成立、領域成立の確認点の設定であると言いうことが出来る。*déjà* 自身は事態成立、領域成立には直接関与しないが、どの点でその成立が確認されるかが常に問題なのである。このように考えると、*déjà* は *précocité* を表わすという意味では時の副詞だと言えるが、話者の確認に関与するという意味では主体に結びついたモダルの副詞と言いうことが出来る。

## 2. モウ

さて、モウの観察に移ろう。モウの用法も多岐にわたるが、小学館国語大辞典、三省堂新明解国語辞典のモウの項目、実例の観察を考慮すると、一応以下のように分類することが出来るであろう。

### 時間的用法

先生はモウお帰りになりました。

モウそろそろ行きましょう。

### 評価的用法

これでモウ安心です。

モウすごいなんのって。

### 数量限定的用法

モウ一杯おかわり。

モウ一枚の絵は書斎に飾ってある。

この分類に従って観察、考察をすすめ、モウのはたらきを明確化してゆきたいと思う。各用法のより細かい下位分類については観察の途中でとりあげることになるであろう。

モウについては、すでに、石神(1978)に原理的な考察があり、森田(1982)にも石神のそれとは矛盾しない的を得た意味記述がある。その他ロドリゲスの

日本大文典以降の様々な日本語文典にはモウの記述がなされているが、本稿のねらいは、*déjà* と対照し得る視点を確立し、そこからモウのはたらきを見なおすことである。従って記述自体に石神や森田と矛盾とすることはないが、より一般化可能な形でモウのはたらきを規定してゆくことになると思う。

## 2.1. 評価的用法

モウと *déjà* は時間的用法で最もよく対応するが、その酷似の故にかえて相違を論ずることは難しい。モウのはたらきを明るみにするには評価的用法の検討から始めるのが妥当であろう。

次の例を比較してみよう。

[32] *c'est déjà intéressant.*

[33] これはモウ面白い。

例[32]は既に見たように、それだけでも（とても）面白い、と解釈されるが、この場合の *déjà* は[33]のモウには対応しない。[33]は文脈がないと奇妙に感じられるかも知れないが、

[34] これはモウ面白いのなんのって、*！／面白くてたまらない、！*

のようにすると感嘆文として十分に成立する。これは森田（前掲書 pp. 438-439）の提唱する、「事柄が、話し手の意識中の基準点を越えている場合に用いる」、という考え方に通じていると思われる。つまり[34]では面白さの程度が問題であるが、基準点（発話時点）でその程度が度を越す、ズバ抜けていると話者が認めるのである。*déjà* は *précocité* を構築し、その早なりの点で事態、評価対象領域の成立を確認したが、モウは基準点で度を越えたものとして事態や領域を把えるのである。モウは一言で、*dépassement*（超過）を表わす、と言えるだろう。要はモウがいかなるはたらきによって *dépassement* を構築するのかを明確にすることである。再び[34]に戻る。この例は面白さの程度が評価の対象領域だと把えなおしてもよいと思われるが、どの程度の面白さが問題かと言えば、モウは普通に考えられる程度の限界を超えた程度を話者の確認点として設定しているのである。この解釈から二つのことが帰納されよう。(i) まず話者が確認し得る、又は、すべき対象領域が前もって設定されていること。(ii) その対象領域の限界点 (*limite*)、或は一般に境界 (*borne*) を越えたところを話者が基準点で確認すること、である。(ii) の *dépassement* の考え方は、[34]のように感嘆文ともなるが、次の例では限界に達したことをだけを表している。

[35] モウいいです。／モウ結構です。

日本語のイイに対応する仏語のマーカーは *bien* であるが、

[36] *C'est déjà bien.*

はこれだけでも充分であると解され、まだ他にもよいものがあることがほのめかされる。モウと *déjà* の根本的な相違がここにも見てとれよう。

*dépassement* の考え方を援用しないと、おそらく、冒頭で見たヒステリックなモウの使い方も理解出来ないと思われる。

[37] 何よ、あなたったら、モウ！

モウのあととは状況によって様々に否定的な内容が補えるが<sup>8)</sup>、モウは通常あなたに与える評価の枠を超えたところを話者が認め、引き受ける領域を規定する。そこから、話にならないあなた、がまんのないあなた、等の解釈が生じるのだろう。

## 2.2. 時間的用法

*déjà* が *précocité*、モウが *dépassement* を表わすのが基本的な相違だとすると、時間的用法においても、結果的には酷似した意味になるが、その過程において違いが見られることになる。次の二例を検討しよう。

[37] 彼はモウ起きている。

[38] *Il s'est déjà levé.*

例[38]は結果状態の確認点が予想より早くたてられたことを表わしている。それに比べて、モウにおいて確認点は一定して発話の現在であり、予め設定された基準点以前として把握されていると考えなくてもよい。モウは発話時点（基準点）において話者が確認する領域を規定する。そこに超過という見方が現われるのである。[37]では、従って、発話時点でまず「彼の起床」が成立可能な事態としてとりあげられ、モウはその成立可能な事態がすでに成立したものと表わす。その、言わば、*à faire*→*fait*, *validable*→*validé* の動きがモウのはたらきによって現われるのである。

*déjà* とモウのちがいは否定文でよりはっきりする。

[39] 帰ってちょうだい。あなたのことなんかモウ好きでも何でもないわ。  
仏語の相当文は、多少語気が変わるが、

[40] *Va-t'en! Je ne t'aime plus du tout!*

となる。否定文中のモウは仏語では *déjà* ではなく、*ne-plus* の解釈をうける。これも発話時点で「あなたが好きであること」の限界を超えた領域（即ち「あ



なたを好きではないこと」) が話者の確認の対象となると考えればよいであろう。

[41] Je ne t'aime *déjà* plus du tout.

とすれば、*déjà* とモウが一見対応する形になるが、[41]はあなたのことが好きではないことが今から (*dès maintenant*) 早くも成立していることを意味する。

*déjà* とモウの時間的用法は経験を表わす場合にも違いを見せる。

[42] Il paraît que vous êtes un joueur exceptionnel. Avez-vous *déjà* triché?

あんたは稀にみる賭事師らしいが、(今までに) いかさまをしたことがあるかい。

この例の日本語訳にモウを付加すると、いかさまがなすべき義務のように感じられて奇妙である。しかし次の例では、モウと経験の解釈は矛盾しない。

[43] モウ日本へ行ったことがありますか。

モウは、発話時点において、*validable*→*validé* の動きを表わしているのだから、日本へ行くことがまず成立可能な事態として志向され、それが発話時点ですでに成立したものとして確認されるのであろう。成立可能な事態として志向される為、述語に意志、目的を担った動詞が来て自然である。それに対して *déjà* は今問題となっている事態はすでに以前に成立してしまっていることを表わすだけであるから、述語の意味的制約はモウより緩やかである。

未来時に関わるものは仏語では *bientôt* (間もなく)、*tout de suite* (すぐに) の解釈をうけ、*déjà* とはかなりかけ離れてしまう。

[44] モウ帰りましょう。

[45] On va *bientôt* rentrer.

[46] モウ雨もやむことだろう。

[47] Il cessera *bientôt* de pleuvoir.

例[44]～[47]におけるモウは何処に *dépassement* を構築するのであろうか。直観に即して考えると、おそらく、発話時点で(今まで)問題にならなかった(なり得なかった)事態が、即ち考慮の対象外であった事態が、これより先問題とし得る事態、考慮の対象となる事態として把握されるところに *dépassement* が現われるのだらうと思われる。換言すると、ここには、*non envisageable* P→*envisageable* P という動きがはたらいているのである。モウはまさに基準点において、話者の確認すべき領域として、まだ実現していないが実現

が将来において确实だと扱えられる領域を規定すると言えよう。

時間的用法に関しては、モウとテンス・アスペクトを表わす～タ、～テイル、～ル形などとの共起制限、述語の意味内容、属性との影響関係その他問題は多く残されているが、一応 *déjà* との基本的な相違点は把握し得たと思う。

最後にモウの数量限定的用法に移ることにする。

### 2.3. 数量限定的用法

この用法については、KAWAGUCHI (1982) に興味深い指摘がある。それによると、モウは二つのタイプの数量限定的用法に下位区分される。(pp. 55-56 参照)

(1)一モウ一人来た。

—また来たの?!

(2)一ふたりのうち一人はきのう来た。モウ一人はきょう来た。

—\*また来たの?!

(1)のタイプは何人か(も)来たうえに、更に一人来た場合。この場合、来たという事態は反復し、また来たのと言り返すことが出来る。(2)のタイプは予め或る集合が成立し、その集合の一員としてもう一人を把える場合。(1)は同一の述語内容を満足させる成員を問題にし、(2)は集合から出発して、その成員が結びつく様々な述語内容の方が問題となる。

しかしこれはモウのはたらきに関与しているというよりも、モウの機能する文脈の細分化の問題である。KAWAGUCHI のこの区分は、モウとマタを対比した場合に反復性 (*Valeur d'itération*) が(1)にはあり、(2)には無いことを明確にしている意味で重要だが、モウ自体は事態の反復性を積極的に表わしてはいない。モウについて重要なことは、モウのはたらく数量化可能な領域(集合)が予め設定され(その設定の仕方は上記の如く開集合と閉集合の二ケースがある)、すでに少なくとも一成員が数量化されていること。そして、やはり、*dépassement* を構築することである。即ち(1)の文脈では成員の超過(モウ一人)を表わし、(2)の文脈では、すでに閉じられた成員の集合の中で、区別された成員(モウ一人別の人は)を表わすことになる。

この用法のモウは確かに時間的、評価的用法のモウとは *dépassement* の構築という点では共通しているが、話者の発話時点における確認領域の設定までは行っていない。ここで語源の問題に触れざるを得ない。小学館国語大辞典によると、(1)副詞「も」と同語源の語であるが、その成立の前後は不明。(2)

「ロドリゲス日本大文典」には「mō(マウ)ハヤ」の形が見られる。同義の「ま」「まあ」が転じて「も」「もう」となったものか (p. 24), とある。KAWAGUCHI の指摘するように通時的な詳細な研究なくして、やはり、モウの様々な用法を一つの単位として扱うのは早計であると言えよう。と同時に現代語における、とくに口語でのモウの頻度の高さを鑑ると、語源はともあれ現代の話し手の意識の中ではモウは一つの単位なのではないか、と考えるのもそれほど不自然なことではないであろう。モウは *dépassement* において共通したはたらきを担っている、ということが、研究の現段階で確実に言えることである。

### おわりに

*déjà* とモウをそれぞれの言語体系内で観察しそのはたらきを考えてゆくことによって、*il est déjà cinq heures* と「モウ五時だ」が結果的には同義であっても操作の段階でかなり相違していることが明らかになった。考察を進めてゆく中で、話者の確認、確認点、確認領域、事態の成立、話者の評価対象領域などの概念を分析に必要な道具として援用したが、それは体系の異なる日仏両語に言語活動として同質の枠組を与えようとする努力に他ならない。本稿では観察、考察が直観レベルにとどまった為、分析概念も定義のないまま用いたが、これらの概念の有効性については稿をあらためて検討したい。

*déjà* の観察では、否定文中の *déjà* の問題、統辞的特性 (特に語順) について言及する余裕がなかった。又、*dès que* (～するや否や) や *auparavant* (以前に) 等の対比についても論じなければならない。モウも同様に、統辞的特性の解明は急務であり、又スデニ、今、ハヤなどの対比の中での把握も不可欠である。

本稿では対照する為には対照し得る対象を先ずつくらなければならない、という自明な観点から、*déjà* とモウをそれぞれ *précocité* と *dépassement* の構築として扱った。*déjà* は話者の確認点 (時点、程度) を以前、以下と規定する。モウは確認領域を発話時点で基準を超えたものと規定する。このことは、とりもなおさず、*déjà* が事態とはあくまで離れた、コトの外側での確認点の構築なのに対し、モウが *dépassement* という事態のウチ側の変化を構築していると言えるのではないだろうか。ここで中世仏語の *ja* の用法との対比が問題となる。*Dictionnaire de l'ancien français jusqu'au milieu du XIVe siècle*

(éd. 1980) には、

1°) Maintenant 今 (例文省略) —2° Par rapport au passé, Déjà 過去に関して, déjà すでに (例文省略) —3° Par rapport au futur, Aussitôt 未来に関して aussitôt すぐに (例文省略) ◆ Dans une phrase négative : 1° Le sens correspond à ne... plus 否定文において 1° 意味は ne... もはや... ないに相当する (例文省略)

—2° Renforcé par mais, jor, le sens correspond à jamais 意味は mais, jor に強められて, jamais 二度とないに相当する

とある。中世仏語の *ja* の詳細な分析と、モウとの対照は現代仏語の *déjà* 以上に重要な研究課題である。それなくしては、仏語ではコトのソト側から (つまりムード的), 日本語ではウチ側 (つまりコト的) に確認点, 確認領域を規定するのが特徴的であるというような類型的な結論は導き出せないからである。

英語の *already* との対照, 古い日本語の既 (スデニ) の使い方<sup>10)</sup>, 又, 中国語, 朝鮮語, ベトナム語<sup>11)</sup>でどうなっているのか, などその他興味深い研究課題は尽きない。対照研究に意義があるとすれば, 言語の多様性の認識とその多様性を同質に扱うことの出来るメタ言語の視点を獲得することであろう。言語活動の研究は, 様々な言語の専門家の共同研究をぬきにして考えられない段階に来ているのである。

#### [注]

- 1) 本稿の執筆にあたってインフォーマントの Paskal Yamak 氏との長時間にわたる議論から様々な示唆を得た。ここであらためて感謝の意を表したい。
- 2) 対照言語学の可能性に開眼したのは, バリ第七大学 Antoine Culioli 教授の言語理論との接触である。ただし本稿で理論のテクニカルな側面は扱っていないので, 直接的な理論への言及はない。
- 3) 大ざっぱにまとめると, MULLER は生成意味論的な立場から特に前提を問題とし, HOEPELMAN & ROHRER は時間論理学の立場から *déjà* の意味構造の形式化を試み, MARTIN, VET も論理的に *déjà* の意味構造を論じる。特に MARTIN は *déjà* の前提構造とアスペクトの性質の関係を論じている点ユニークであるが, これらの言語学者は *déjà* の時間的用法のみを扱っており, *déjà* それ自体のはたらき全体を観察していない。方法論によって観察の幅をせばめ制限してはならないというのが本稿の立場である。その視点からは FRANCKEL の言語観察が最も細かい。F. は基本的に Culioli の発話理論に基づいて *déjà* の opération を明確化しようと試みている。
- 4) この解釈は木下光一氏に示唆していただいた。
- 5) 定着と確認の区別の重要性は1983年7月フランシュコンテ大学で行なわれたアスペクトに関する研究会議で Denis Paillard 氏の《現代仏語における現在形, 複合過去形, être en train de について》と題する発表の中で指摘があった。*déjà* の分析にも

重要な考え方だと思われる。

- 6) 仏語の単純未来形については, CULIOLI (1978)に *Il nous faut rappeler deux propriétés du futur* :

(1) le futur implique une visée. On entend par là que, du repère énonciatif *Sit.*, on vise une relation prédicative non encore validée *li*. Puisque la relation prédicative n'est pas encore située (repérée énonciativement), elle est un énonçable (un construit notionnel) qui a la propriété ( $p, p'$ ); dire que l'on vise *li* signifie que l'énonciateur distingue une des valeurs de ( $p, p'$ ),  $p$  pour fixer les idées. Il dit, considère, espère veut, ordonne, craint, suppose, etc., etc. que, en *Ti*, la relation prédicative sera validée. Ainsi en  $Ti = T'o$ , on a ( $p, p'$ ) et l'on vise  $p$  en *Ti*. Nous noterons la visée ( $p/p'$ ), où la barre oblique marque que la visée de  $p$  dans ( $p, p'$ ) n'entraîne pas nécessairement la réalisation de  $p$ . On est donc, d'un point de vue modal, dans le non-certain, puisque le certain se caractérise par une probabilité 1 : il s'ensuit que, seuls, le révolu ou l'actuel sont du certain.

(2) le futur est un aoristique. De façon schématique, cela signifie qu'il y a rupture entre l'énonciation de la visée ( $Ti = T'o$ ) et sa validation visée par le biais de l'énoncé (*Ti*). On peut montrer, par raisonnement indépendant, que la relation prédicative est validée lorsqu'on passe de  $p/p'$  à  $p$ . Ceci peut être représenté par un intervalle borné fermé constitué à partir de, au moins, deux topologies : l'une sur  $\rho$  et l'autre sur  $\tau \rightarrow T$ .

とある。これが考察の基本となっている。

- 7) FRANCKEL (p. 116) は *déjà* を, Etant donné un point distingué en *To* *déjà* marque l'appartenance de ce point à l'intérieur ou à l'extérieur d'un domaine comme trace du passage de l'un à l'autre et sans adjacence à la frontière qui les sépare. *Déjà* implique donc *traversée et dépassement d'une frontière*.

と規定しているが, これは本稿の *précocité* と考え方が異なる。後で見るとモウのはたらきは上の F. のように規定出来るだろう。F. の仮説と本稿での仮説はどちらがより事実に基づいているのか詳細な検討を行なわなければならないが, 本稿の論旨を明瞭にする為には, 別の機会にもちこさざるを得ない。

- 8) *d'ailleurs* については, DUCROT et al. 1980, OGUMA 1986 参照。  
 9) 否定的内容はタラの制約によるものと思われる。これについては, Oguma. 1983, pp. 105-112 参照。  
 10) 土淵1979 参照。  
 11) Vuthingan 1985 にベトナム語のモウや〜テシマウに似た *-da* の分析がある。

### [参考文献]

- CULIOLI, A. (1978) : 《Valeurs modales et opérations énonciatives》, *Le Français Moderne*, T. 46, Vol. 4  
 DUCROT, O. et al. (1980) : *Les mots du discours*, éd. Minuit, Paris  
 FRANCKEL, J. -J. (1982) : 《Déjà》, *Bulletin de Linguistique Générale et Appliquée* n° 9, Université de Franche-Comté  
 GUILLAUME, G. (1964) : *Langage et science du langage*, Nizet (rééd. 1974)  
 HEPPELMAN, J. & ROHRER, C. (1980) : 《Déjà et encore et les temps du passé en français》,

- La Notion d'Aspect*, éd. par DAVID, J. & MARTIN, R., Metz
- KAWAGUCHI, J. (1982) : 《*Uu grammairien japonais du XVIIIe siècle et la linguistique japonaise*》, *Langages*, n° 68, Larousse, Paris
- MARTIN, R. (1980) : 《*Déjà et encore : de la présupposition à l'aspect*》, *La Notion d'Aspect*, éd. par DAVID, J. & MARTIN, R., Metz
- MULLER, C. (1975) : 《*Remarques syntactico-sémantiques sur certains adverbes de temps*》, *Le Français Moderne*, T. 43, Vol. 1
- OGUMA, K. (1983) : 《*Sur les formes hypothétiques en japonais -En référence au français*》, *Thèse de 3e cycle*, Paris 7
- (1986) : 《*D'ailleurs*》, à paraître
- VET, C. (1980) : *Temps, aspects et adverbes de temps en français contemporain, Essai de sémantique formelle*, Droz, Genève
- VU THI GNAN (1985) : 《*Temps, aspect et modalité en vietnamien : contribution à l'étude du marqueur DA*》, *Bulletin de Linguistique Générale et Appliquée* n° 12, Université de Franche-Comté
- 石神照雄 (1978) : 「時に関する〈程度副詞〉「マダ」と「モウ」—〈副成分〉設定の一試論」『*国語学研究*』18, 東北大学
- 土淵知之 (1979) : 「すでに(既)の用法と意味について—付属語との呼応関係を中心として」, 『*国学院雑誌*』80-8
- 森田良行 (1982) : 『*基礎日本語 1*』, 角川書店

(辞書は省略)